

土井 晚翠 — 新しい詩の世界を開く —

春高楼の花の宴

めぐる盃影さして

千代の松が枝わけ出でし

むかしの光いまいづこ

【歌詞の意味】

春には、もどここにあった城の中で、にぎやかな花見の宴が行われたにちがいない。はずむ声、笑い、酒をくみかわすさかずき……。そして、城壁の大きな松の枝あいからは、月の光がさしこんでいたであろう。そんな昔のおもかげは、今はどこへいったのだろうか。

仙台市を眼下に見下ろす青葉城址には、郷土が生んだ詩人、土井晚翠の名作「荒城の月」の詩碑があります。この詩は明治三十一（一八九八）年上野の東京音楽学校（現在の東京芸術大学）から頼まれて作られたものです。滝廉太郎により曲がつけられ、時代を越え人々に歌いつがれています。



青葉城址の「荒城の月」詩碑（仙台市文学館蔵）

晚翠は、明治四（一八七二）年、仙台市北鍛冶町（現在の青葉区木町通）で質屋を営む、土井林七の長男として生まれ、名前を林吉といたしました。小さいころから、祖母に和歌の手ほどきを受けたり、父親から八犬伝などの物語を聞いたりして育ち、本を読むのが好きな子どもでもでした。

小学校の授業で、中国の歴史物語『十八史略』を学ぶと、難しい本にも興味をもち、夢中になって

質屋：

お客さまがもってきた着物などの品物をあすかりそれと交換にお金を貸す商売。

和歌：

古くから日本にある定型詩。主に五七五七七の句からなる。

八犬伝：

江戸時代後期に滝沢馬琴によって著された本。

読むようになりました。その勉強ぶりは、先生方をも驚かせるほどでした。

「本には、ぼくの知らないたくさんの知識がたまっています。もつともつとたくさんのことを知りたくてたまりません。先生、ぼくは、中学（現在の高校）に進んで、学問を学びたいのです。」

林吉は、真剣なまなざしで自分の夢について語るのです。

十三歳で小学校高等科（現在の中学校）を卒業した林吉は、いよいよ中学校への進学を本気で考えるようになりました。ところが、祖父から商売をするのに学問などは必要ないのだから、中学などに絶対やっではならないと、強い口調で言い渡されてしまった父は、祖父のいいつけにそむくことができず、林吉にそのことを告げるしかありませんでした。

父に説きふせられた林吉は、質屋の店先で見習いとして働くことになり、毎日、お客さんを相手にしたり、品物を倉から出し入れしたりする仕事にあけくれました。しかし、林吉は、『自由の燈』という新聞やその当時発刊されたばかりの『新体詩抄』という本をいつも大事にたずさえていました。少しの時間を見つけては、ひとみをかがやかせ、未来に夢をもちながら、新しい形の詩を口ずさむのです。『新体詩抄』には、西洋の詩を翻訳したものもありました。林吉は、西洋の文学や英語にも興味をもち始め、英語の通信教育も始めました。見習いの仕事をしていても、学ぶことはやめませんでした。

十六歳のころ、林吉は、このまま質屋の主人としての仕事をずっと続けていくかどうかを考えていました。そんなとき、すぐ近くの仙台の国分町に「仙台英語学校」ができることを聞きました。当時としてはめずらしい英語を学ぶ学校で、働きながら学ぶことができたのです。しかも、英語学者として有名な齋藤秀三郎先生が教えてくれるという話を聞くと、林吉はいてもたってもいられませんでした。店で品物を並べているときも、重い荷物を運んでいるときも、頭の中は英語学校のことであらばいいでした。

新体詩抄：
伝統的な短歌や俳句に代わる新しい詩型を提示した詩集。

翻訳：
ある国のことばや文を日本語に直すこと。

英語学者：
英語に関する学問を研究する人。

いったんは父にしたがった林吉でしたが、胸に燃える学問の灯はどうてい消すことができなくなっていました。

林吉は、ある夜、思い切って父と祖父の前に正座して話を始めました。

「わたしは、どうしても英語学校で勉強したいのです。店の手伝いもしますから、通わせてください。」

祖父は、ふきげんな顔をしながらいいました。

「お前が跡をつがなければ、この質屋はどうなるんだ。」

「お父さんがじょうぶなうちは、自分の好きな学問をしてもよいのではないですか。」

しばらく沈黙が続きました。やがて、父が口を開きました。

「店での修業に努めながら、合間を見ては本を読むおまえの姿を見ていたよ。しかたない。お前がどうしても学問をしたいという気持ちはわかった。」

父の言葉を聞いた祖父も、

「よかろう。ただし、中途半ばな気持ちではいけないぞ。」

と、ついに進学を許しました。

林吉は英語学校での授業を思いうかべ、自然と笑みがこぼれました。

喜びいさんで通学し始めた林吉は、夜中まで机の前に座っていることがよくありました。マコーレーの『フレデリック大王論』や、ビクトル・ユーゴーの伝記などに心をうばわれ、英雄や文学者の面影を心に描きました。あれこれ想像していると、時間のたつことも忘れてしまうほどでした。

その後、仙台にできた第二高等中学校（現在の東北大学）に十八歳で入学し、学問への情熱をますます燃やしました。

さらに、校友会雑誌に詩をのせる機会を得て、ペンネームを晩翠としました。東京帝国大学（現在の東京大学）英文科に進み、勉強のかたわら、雑誌『帝国文学』の編集委員となり、次々と詩を発表し、堂々として力強い晩翠の詩は評判になりました。晩翠は、日本を代表する詩人となり、『新体詩』と呼ばれる新しい詩の確立に大きな功績を残しました。



青年期の土井晩翠（仙台市文学館蔵）

詩人として成功した晩翠は、明治三十三（一九〇〇）年、仙台にもどり母校である第二高等学校（現在の東北大学）の英語の教授になりました。また、晩翠は外国文学の翻訳を行ったほか、多くの校歌の作詞を手がけました。仙台市立立町小学校の校歌には「努めて倦まず身を立てて国と民のためつくせ」（途中であきらめることなく努力を続け、人々のためにつくしなさい）という歌詞があります。このような生き方を語りかける晩翠はたくさんの方に慕われました。

現在も、「荒城の月」は多くの人に歌いつがれています。

土井晩翠

土井晩翠（土井林吉）は、明治四（一八七一）年、仙台市に生まれた。東京帝国大学（現在の東京大学）英文科を卒業後、島崎藤村と並ぶ詩人として注目され、「新体詩」と呼ばれる新しい詩の確立に大きな功績を残した。昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれ、文化勲章も受章した。代表作に『天地有情』がある。